

津田式ケーボー号と井戸水

西田 孝司



高見ノ里駅上りホームに残る「津田式ケーボー号」ポンプ



戦前の高見ノ里園芸住宅時代の民家（高見の里1丁目）二階にはシンプルだが、上下に角材を組んだ意匠が見られる。

高見ノ里駅、大臣マーク 手押しポンプと生活用水

近鉄高見ノ里駅の大阪阿部野橋行き上りホームに、今は使われていませんが、手押しポンプが残されています。ホームに旧式のポンプが見られる駅は、関西でもほとんどありません。

改札口を入れてホーム中ほどに設置されているポンプには、本体上部前後に菱形マークの中に「大臣」の文字が入り、その下に「ケーボー号」とあります。また、下部前後には二つの三重線の区画の中に「津田式」と分けて、大きく鑄られています。水口やハンドルにも、菱形マークの「大臣」銘が記されていることがわかります。津田式ケーボー号と呼ばれるものです。

ポンプの下には、当然、井戸が掘られており、駅員さんが毎日ホームで水の散布を行っていたのです。高見ノ里駅は、昭和七年（一九三二）九月一日に開業したのですが、井戸は昭和十六年（一九四一）以降、二十年（一九四五）ごろまでに掘られ、ポ

ンプが備え付けられたようです。

津田式ポンプは、ポンプ王と呼ばれる広島津田喜次郎（一八八八～一九五九）が、大正九年（一九二〇）に開発した昇進式ポンプです。津田のポンプがのち、商工大臣となった藤沢幾之輔（一九二六～二七、第一次若槻礼次郎内閣）の称賛を受けたことから、昭和四年（一九二九）に「大臣」の商標が出願されました。昭和十六年から広島工場の本格的に製造されるようになり、同年の官報で菱形の「大臣」マークが社票と認められ、第一級規格品とされたのです。

しかし、昭和二十年の広島への原爆で、工場が破壊され、生産が縮小されました（戦後、復興）。ポンプが設置されたと思われる昭和十六年ごろ、現在の近畿日本鉄道（近鉄）は大坂鉄道（大鉄）と呼ばれていました。その大鉄が十八年（一九四三）二月に関西急行鉄道（関急）と合併し、さらに、翌十九年（一九四四）六月に南海鉄道と合併（後に再独立）して、今の近鉄が誕生したのでした。

松原市は、昭和三十年（一九五五）二月一日に市制がしかれましたが、それまで市域には水道が引かれず、人々の生活用水は主に井戸水に頼っていました。三十年十二月に市役所に水道課が出来、同年に上田・阿保

地区から送水が始まり、翌年から各地区でも水道が通ったのでした。

高見ノ里駅付近では、三十一年に水道が使われるようになり、やがて駅の井戸水も利用されなくなりました。高見ノ里駅は、四十六年（一九七一）に今のよう地下道で結ばれ、大幅な工事が行われたのですが、井戸は埋められず、ポンプも撤去されなかったのです。

ところで、戦前、高見ノ里駅周辺に多く掘られた井戸が、今もホームだけでなく、住宅地にくっきり残っています。林明が昭和二年（一九一七）に高見ノ里園芸住宅を開き、井戸水から土管を敷いて簡易水道を設けました（歴史ウォーク185）。その水源となった井戸が高見の里一丁目の長尾街道沿いの薬局北側の駐車場にアスファルトで整地されていますが、現存しています。井戸の横には、ポンプ小屋（水道小屋）が建てられていました。

線路北側に沿った住宅地東端の道にも、石筒は新しくなっていますが、井戸が残され、打ち水として活躍しています。

今でも、旧ポンプ小屋の南側に高見ノ里園芸住宅開発当時の住宅が残っており、駅の「津田式ケーボー号」と共に昭和前半期の面影をただよわせていました。

- ニュース 松原
- 情報ひろば
- 人権
- 子育て
- 環境談
- 安全
- 健康
- 税
- 消費生活
- 福祉
- 教育
- 保険年金
- 子育て支援コーナー
- 各種相談
- 歴史ウォーク
- しゅくす 催し
- 講座 イベント
- スポーツ
- 図書館
- 地域交流
- みんなの広場
- イベントガイド